



新たな芸術の創造と「喜びと夢ある」文化メッセージを
社会へ次の世代へと語り継いでいきます



「三十周年誌に寄せて」

株式会社うたまくら

代表取締役社長 歌枕 直美

一九九二年四月一日 有限会社うたまくらは誕生しました。音楽関係の仕事がどんなに大変かわかつてのスタートでした。仲間と会社を立ち上げて、気がついたら三十年経っていて、私は還暦を迎えていました。出会い、別れを繰り返して今、新しいページが開かれます。

この三十周年誌は、現在の私たちの活動を見守り、協力して下さっている尊敬する先輩方、先生方のお声を頂戴することができました。また、三十年うたまくらの裏方として私を支えてくれた松田千鶴さんの記念誌もあります。

小さくてもいい、深くて丈夫な井戸を掘れ！ー幸田露伴ーを座右の銘として歩いてきました。

これからもチームワークを財産とし、心豊かに歩んでゆきたいです。どうぞ今後とも御支援よろしくお願い申し上げます。

熟田津に^{にぎたづ}

船乗りせむと

月待てば

潮もかなひぬ^{しお}

今は漕ぎ出でな^こ

万葉集巻一八

対訳

熟田津で、船出をしようと月の出るのを待っていると、月も出、潮も満ちてきた。さあ今、漕ぎ出そう。

歌枕直美CD「みやびうた」より

「新たな船出に寄せて」

奈良トヨタグループ代表

菊池 攻

歌枕さんとのご縁ができて四半世紀になります。なら百年会館での、「新車クラウン内見会」の時にゲストとしてお招きしたのが最初です。透みわたるソプラノ、それとは対象的に明るいキャラクターに魅せられました。その後、東大寺二月堂の二〇〇〇年にわたる伝統行事「お水取り」にご案内させていただきました。それから定期的に行事のご案内をいただき、時々参加させていただきました。

時は流れ数年前に枚岡神社でのライブに参加させていただきました。病に倒れられ、数年間のリハビリ生活を経て、復帰されたその姿に感動いたしました。同世代の者として、歌枕さんのプロ意識の強さに圧倒された次第です。しばらくしてから奈良・猿沢池にあるホテルで「南都和唱会」が催された折に、歌枕さんに挨拶させて頂きました。足は不自由にされておりましたが、明るい笑顔とお話に、何か心温まる思いがしました。「ご縁」がつながるというのは、これだなと感じました。

この二年間には、グループの新会社出発式、奈良トヨタ会、モビリティガールデン香芝の竣工式と、その度に美しい歌声を聞かせていただいております。歌枕さんの拠点の茶論にもお招き頂き、スタッフの皆さんと共に楽しい時間を過ごさせて頂きました。また先日は当グループの賢島研修所にお越し頂き、三〇周年のお祝いもさせて頂きました。

会社の社長室に「結縁・尊縁・随縁」という額を置いております。「縁を結び、縁を尊び、縁に随う」という意味です。NHKの名アナウンサーだった宮田輝さんの座右の言葉です。空白期はあったものの、お互い今の歳になって楽しい関係を築けるのは不思議なものです。歌枕さんの代表曲「船出の歌」のように年齢を重ねても、その年代にあった「船出」ができるのだと思います。歌枕さんの新たな「船出」に期待しております。

30周年記念対談

壺阪寺 常盤住職 × 歌枕直美



2022年8月
うたまくら夢工房（社長室）にて撮影

歌枕直美が、大学を卒業してまだ間もない頃、ご縁があり壺阪寺の先代住職 常盤勝憲師と出会いました。ほんの短い期間の交流でしたが、先師から贈られた言葉「心豊かに生きること」その言葉は今も歌枕の中で生き続け、生きるうえでの道標となっています。37年の年月を経て、先師のご子息 常盤勝範師にお会いすることができ、先師について語り合い、30周年誌にふさわしい対談が実現しました。

感謝

歌枕直美…本日は、吹田まで足を運んで下さりありがとうございます。私が二十代の時、自分がこれからどうやって生きていくのかと思っていた時に、前住職であるお父様（常盤勝憲師）に出会いました。私が生きていく礎となる先生でした。意志を継がれているご住職（常盤勝範師）とお話ができる機会をいただき、本当に感謝しています。

常盤勝範…ありがとうございます。奈良トヨタの菊池攻社長のご縁でお会いすることができ、大変うれしいです。

歌枕…ご住職と私は昭和三十七年生まれで、共に還暦を迎えました。学生時代アメリカのテレビドラマ「メメル・ストリー」主演の「ホロコースト」が放映されていましたね。大変印象深い作品でした。

常盤…はい。私は父と一緒に「ホロコースト」を見ました。それがきっかけで、ユダヤ問題が心に深く入りました。

歌枕…私もこの作品からユダヤ問題について興味を持ち、十数年前、海外公演でポーランドに行っていた時、二度に渡りアウシュヴィッツ博物館を訪れました。暗い歴史と遠ざけていらつしやる方もありますが、私は、行きたいという思いが強くあり、その事実を見聞きし、自分が何ができるのかを考え行動することが重要だと思いました。

常盤…本当にそうですね。自分で見聞きし感じるものが大切ですね。父は、当時のヨーロッパの風潮のようにひとつの課題だけで皆が集まることの恐ろしさがあると言います。独裁政権、一つのことだけを信じる恐ろしさについてディスカッションした記憶があります。

歌枕…家でも、お父様は社会問題をお話されていたりしたのですか？

常盤…はい。演説状態でしたね。父は、恵まれない人のために国内外を飛び回り留守が多かったのですが、家にいる時は、家族に向かって日米関係、日ソ関係などの話をしていました。

歌枕…家庭環境が素晴らしいですね。

ところで、私がお父様にお世話になっていたおおよそ二年間、その頃、住職はどちらにいらしたのでしょうか？お目にかかる事がありました。

常盤…アメリカにいました。ネブラスカ大学の大学院で植物遺伝学を学んでいたが、突然父親が末期癌であることを知らされ、急遽帰国しました。

歌枕…あまりにも急な事だったと記憶しています。ご住職はお寺を継ぐ決意はあったのでしょうか。

常盤…父がしていることはお寺の住職だけでなく、社会福祉事業―盲人福祉事業、インドでのハンセン病患者の救済活動と、行なっていたことがあまりにも大き

くて自分にはできないと思いましたが、特にインドの事業は、生活の糧にされている方が大勢おられましたので、父親が亡くなったからと止めるというわけにもいかずやるしかないと思いました。そして二十六歳で父が亡くなり、二十七歳で住職となりました。

歌枕…大事業を引き継がれるのは大変だったのではないですか。

常盤…はい、本当に大変でした。その当時は今と違って、本人に癌告知をしない時代で、父に本当のことを言えないので、直接話を聞くことができず、父の付き合いのあった人、仕事のパートナーのリストを手に、その方々とアポを取って全国各地あちこちに話を聞きに回り、父の亡き後の事業について相談させて頂きました。息子としては残酷ですね。父が亡くなるとして動いているのですから、それが一番辛かったです。

慈母園の心

歌枕…お父様が、慈母園をつくられた背景のお話も実際に私は聞けて、感動していました。人はここまで実行できるのだと。

常盤…父が僧侶として迷っていたところに、国立ライ療養所長島愛生園園長光田先生と出会い、愛生園を訪れた父が、そこで目が不自由なハンセン病患者の方の指先がマヒしているので、舌で点字を読むた

め、その舌からは血が滲みながらも、本を読んでいる姿に衝撃を受け、迷っている場合ではないと思ったそうです。

歌枕…厚生省に座り込みをして、日本最初の盲老人専用の老人ホーム「慈母園」を作られたとお話を伺いました。数ヶ月なんですが、私は「慈母園」の職員の方のピアノ指導をさせていただいたことがありました。たまにお父様がおいでの際は降りてこられ、私が伴奏をして歌を歌ってくださいました。

常盤…そうなんですか。ありがとうございます。「慈母園」は、境内で福祉事業として養護盲老人ホーム施設を始めましたので、当時非常に批判も浴びた事業でしたけど、それを一人やり抜きました。

歌枕…その実行力に感動しています。お父様が、「坊主は黒子」とおっしゃっていたのを記憶しています。

常盤…父が行なっていたのは、僧侶としての社会事業だと思っています。「黒子になる、黒子がいないと舞台が成り立たない。」「本当に苦しい人は声がでない、苦しみで声が出ない人を見つけたのが僧侶の仕事だ」と、よく言っていました。

歌枕…心に響くお言葉ですね。また、インドのハンセン病の救済活動を行われたのは、どのようなきっかけがありましたか。

常盤…昭和三十年代の南周りのヨーロッパ

パ行きの飛行機で日商岩井の方と出会い、インドでのハンセン病の救済活動が始まったことを聞き、父がとびこんでいましたね。

歌枕…具体的にどのようなことをなされたのでしょうか。

常盤…その当時のインドには、日本でハンセン病の研究と治療に取り組みされていた京都大学出身の宮崎松記先生が団長として、救済活動の陣頭指揮をしておられ、日本から派遣された多くの医師、看護師や事務員の方々が厳しい気候の下、加えて、電気も不十分の中、一日何千人を診察することもあるなど、過酷な状況下の救済活動でしたので、日本から派遣され

た方々の士気が落ちる状況でした。それを慰安するため、日本から食料を持参して、慰安する小宴を催したり、活動資金の募金活動や寺の職員をボランティア派遣するなど様々なお手伝いをお寺をあげて行いました。

歌枕…そうなんですね。実は、私は一九八五年御巢鷹山での日航機事故のすぐあとにお父様にお会いしたんですね。そして、その時に一九七二年の日航機インド・ニューデリーでの墜落事故のお話を直接お聞きしました。宮崎先生を出迎えにいらつした空港で、乗っておられた航空機が目の前で落ち、お亡くなりになられたと伺いました。

常盤…実はその飛行機に父も乗っている予定だったので、母が驚いている時に、父から無事である電報が届き、父は乗っていないことがわかりましたが、当時テレビのニュースで宮崎先生のお写真が放映されるなどして、その状況を知りました。インドでのハンセン病患者の救済活動は、宮崎先生からののはじまりだったので、父は大変ショックを受けていましたが、救済活動へのお手伝いは物心両面で継続しました。

歌枕…インドでの日本航空機事故の救援活動のお手伝いしたご縁で、御巢鷹山での日航機事故の慰霊祭などにも関わられたとお伺いしました。



2022年8月うたまくら夢工房（社長室）にて撮影

常盤…はい。ニューデリーでの事故は、日本航空の初めて海外墜落事故でした。その後の日本航空も対応に苦慮したもので、父がいろいろお手伝いしていたようです。その繋がりがあり、父が関わったのだと思います。

思いやりの心広く深く

歌枕…お父様には、壺阪寺天竺渡来仏像の法要、淡路島「五色園」など、演奏で呼んでいただきました。「五色園」に連れて行っていたいた時、フェリーの中で、森昌子さんがなぜ歌が上手くなったのか、それは動きをつけて歌う訓練を受けて上手になられたと伺い、そんなことまでご存じなんだと思いました。

常盤…その当時、東海林太郎さんやいずみたくさんなど、芸能界の方々も陰ながら福祉の支援をなされていて来られていて、父ともご縁があったようです。

歌枕…そうなんですか。また、今も忘れられないのが、江間章子さんの「花の街」のお話で、焼け野原になった情景の詩を歌いながら説明してくださいました。この曲は、詩を感じて曲がつけられているので情景がみえてくると、反対に詩を感じてつくられていない曲も多く、また歌手も詩を感じずに歌っていることもあると、お話しくださいました。私も詩を生かすための曲だと、それが大事なことだと思っています。

ある時、お父様の講演会に一人で行ったことがあります。その時のテーマは、「医は意なり」で、すべてのことは人の心なんだというお話だったのですが、今、人の心って言ったら嘘っぽく感じるところがありますが、そういうのではない心の話だったと思います。

常盤…現代の心の時代というのが、やさしいのが心だと思われているから、豊かな国になりすぎて、やさしさを間違えていると思います。父がいたらあの人のことだから、金科玉条の言葉を出したと思います。

歌枕…本当にそう思います。

常盤…父は昭和一桁、昭和五年生まれで、その時代に生まれた方が受けた教育は、少し違うと思います。人間の本質を学んでいると思います。そして大戦に勝つと言って負けて、焼け野原をみている時代の人たちの野性的な強さ、時代の流れを読むバランスの感覚、その時代の人たちが亡くなつて、世の中が変わってきたように思います。父は仕事に対して、「ひらめく」とよく言っていました。そういう天才肌の父の後で、タイプが違うから勉強する毎日ですが、父の遺志を継承していきます。

歌枕…しっかり継承されていて、素晴らしいです。

常盤…歌枕さんは同年代でありながら、

本当に信念があつてガッツのある方で、また耳でなく心で聴く歌を歌われ、本当に感心しております。これからもよろしくお願いいたします。

歌枕…こちらこそです。私は、お父様に出会い自分にとって大切なことを学びました。お父様の著書「思いやりの心広く深く」(PHP出版)を、三十年以上ずっと大切にし近くにおいています。改めて本を読み返すと、「医は意なり」のお話がありました。空海の言葉で、人間学の内容を話してくださいました。若かりし頃、そこに感銘を受けたのだと思います。今日はご住職とお話で、改めて「縁」の素晴らしさを感じています。これからご指導よろしくお願いします。

常盤勝範 (ときわしょうはん)

西国六番霊場 壺阪寺(南法華寺)住職
昭和37年奈良県生まれ。

鳥取大学大学院修了、平成元年壺阪寺住職就任。同年、昭和40年代より続くインドでのハンセン病患者救済活動を継続し充実させるため、「財団法人アジア・アフリカ国際奉仕財団」を設立。(平成25年一般財団法人移行)

また、日本最初の盲老人ホーム慈母園並びに、特別養護老人ホーム第二慈母園、障害者支援施設明日香園等、5施設を運営する「社会福祉法人壺阪寺聚徳会」理事長。

平成21年一般財団法人奈良県ビジュアルビューロー評議員就任。

平成23年特定非営利活動法人 全国盲人福祉施設連絡協議会事務局長就任。

平成25年より日本総合研究所(厚生労働省研究機関)老人保険健康増進等事業検討委員会委員就任。

(注) *壺阪寺…南法華寺(みなみほつけじ)奈良県高市郡高取町壺阪にある真言宗系単立の寺院。山号は壺阪山。本尊は十一面千手観世音菩薩。一般には壺阪寺(つばさかでら)の通称で知られる。西国三十三所第八番札所。

(注) *ハンセン病…人類の歴史上もっとも古くから知られ、恐れられてきた病気の一つであるハンセン病は、らい菌が主に皮膚と神経を侵す慢性的感染症。治療法が確立された現代では完治する病気です。一八七三年にらい菌を発見したノルウェーのアルマウエル・ハンセン医師の名前をとり、ハンセン病と呼ばれるようになった。

三本の柱

そして茶論

三十年前、歌枕直美が新しい芸術を創りたい、母国に誇りを持って芸術文化に携わり仕事ができる「環境づくり」からはじめたい、そのためにはその基盤になる組織をつくり責任を負わなければならないと考え、一九九二年四月一日に有限会社うたまくら（現株式会社うたまくら）を設立。代表取締役社長 歌枕直美が誕生しました。「土地を耕すことからではなく、石をのけるところからはじめないといけない。まずは、石の上にも三年でなく十年。そこにかないものを発信する会社になりたい。」という指針がありました。歌枕は自身の芸術活動のみではなく経営者として、会社運営には三本の矢のように、様々な状況の中でも支え合える三本の柱が必要と考え、《うたまくらピアノ工房》《歌枕直美音楽教室》を開設しました。

アーティスト歌枕直美

会社設立後「日本の文化を発信する企業になりたい」と試行錯誤を続けていた中、日本最古の歌集である万葉集と出会い、西洋音楽と日本文化を融合させたオリジナル作品『音楽で綴る万葉集〜みやびうた』を生み出し、一九九七年三月二十四日大阪倶楽部に於いてリリースコンサート開催。タワーレコードをはじめとし、全国のCDショップに拡がり、クラシックでもヒーリングでもない、新しいジャンル「うたまくら」の音楽として評価されました。歌枕は、この万葉集との出会いによって今まで探し続けてきたものがはつきりと見え、この仕事は「天命」と確信。国内外でのコンサート活動を展開しながら、「みやびうた」に続くアルバム「明日香風」「あさね髪」「カエリー」、その後、万葉集を根幹に古事記、日本書紀と枝葉を広げ「やまとうた」「風月同天」、「言の葉」、「古事記ソングス」をリリース。二〇二二年には、二十五周年を迎え、



1997年～2022年
～歌枕直美CDの数々～

「みやびうた」「明日香風」「あさね髪」
「カエリー」「やまとうた」「風月同天」
「言の葉」「古事記ソングス」
NEW CD「天上の苑」

「株式会社うたまくら創立三〇周年のあゆみ」

歌枕直美友の会 名誉会長

上島 朱實

若き歌枕直美さんが仲間と共に立ち上げた「うたまくら」の会社設立が今年創立三十周年を迎えることになりました。心よりお祝い申し上げます。この三十年間を振り返れば乗り越えてきた事々、会社経営の厳しさや喜び、又出会いの楽しさと広がりの手応え、自身の思いもかけぬ病気等感慨深いものがあることでしょう。

私は二十五年前大阪倶楽部での「みやびうたコンサート」に行き現代曲による万葉集を聴いてとても感銘を受けました。古典は常に新しい時代を取り込みながら残っていくのだと思いました。その後記念すべき初めてのCD「みやびうた」を大手レコード店で歌われる様子は初々しく清々しい感じでした。次第に歌枕さんは知られるようになり、曲目も増えて、各地に残る歴史ある建物で演奏会ができるようになりました。数年して「うたまくら」に医師であり博学の古代史研究家であられる菅沼先生を迎えて「和歌劇」の創作が始まります。第一回目的の作品は菅沼先生渾身の「額田姫」でした。この「額田姫」は琵琶湖オペラハウスで上演されました。得難い菅沼先生が存在によって、以後記紀・万葉から数え切れない作品が飛躍的に出来上がります。その作品世界は、壮大であり抒情性豊かであり、男女の機微に通じたコミカルなものもあり多彩です。古代に生きた人達も現代に生きる私達も何も変らず普遍的なものだと解ります。友の会も結成してうたまくら茶論は「みやびうたコンサート」から「やまとうたコンサート」と名称が代わり、セミナーや発表会、コンサート等いろいろな催しをしています。これまで歌枕さんは節目毎に大神神社でご奉納演奏を捧げます。ご奉納演奏の間、拝殿にはそよりと風が渡り神様の気配をいつも感じます。これからも目標に向かって前進しながら益々発展されますようお願いして止みません。

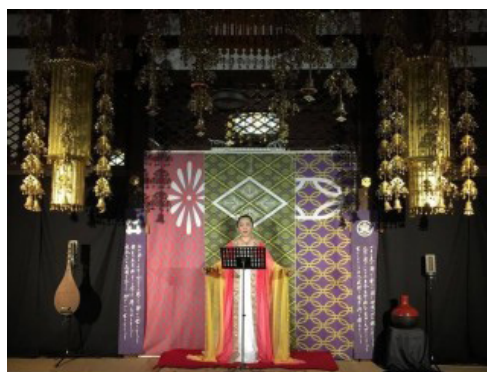


2000年9月奈良県・川西文化会館
能の庭にて「つくよみコンサート」
(撮影：共同通信社)

十月九日ニューアルバム「天上の苑」をリリースします。また、うたまくら設立十年目には、現在歌枕の制作パートナーである脚本家の菅沼登先生との運命的な出会いがありました。そして、菅沼先生脚本の歴史物語「和歌劇」、「音絵巻」において、数々の総合舞台芸術作品が誕生し各地で公演。記紀・万葉『やまとうた』と共に、日本の歴史文化、日本人の心を表現する「歌枕直美の世界」として築いてきました。

《歴史的建造物を活かすコンサート》
日本建築の素晴らしさや、その建物を活かして守ってこられた方の思いを紹介したいと、能舞台や京町屋、神社仏閣、庄屋屋敷、酒蔵などの建物の佇まいや空間を活かした「歴史的建造物を活かすコンサート」を

行なっています。また海外においても、古城や宮殿などにて「歴史建造物を活かすコンサート」を開催しました。



2015年9月浜松・龍潭寺本堂にて
歴史的建造物を活かすコンサート
和歌劇「直虎」公演

「湧き上る」

脚本家・芸術監督・医師

菅沼 登

うたまくら社創設三十周年、おめでとうございます。私とうたまくらの係わりとは、二十年前のある日、新聞で見た歌枕コンサートの取材記事がきっかけとなつて「みやびうた」を知り、和歌劇を作り始めました。それまでは、日本の古代から伝わる伝統（てぶり）・価値観とは何かを追いかけていたのですが、それが万葉集の中にあることに気づきました。古からの風習を受け継いでいるというアイヌの人たちは、野生の獲物を手にすると、それを解体し、食べるだけでなく小さな

部分まで余す所なく利用する。すると、その魂は天に戻ることが出来、時がたつと再び動物の姿になって、この世に戻ってくる。分ける＝解体するということだが、湧く＝魂が天に上っていく、そこに居合わせた人が若くなる＝生氣を得る、つまり分く＝湧く＝若くという連鎖がある様なのです。動物のみならず草や木も人が利用しなくてはならない。それは草や木の魂を循環させることであり、何も手につかないことは彼らにとつて寂しいことなのだという万葉歌もあります。これからもその様な世界を表す作品を創り出すことが、私たちの使命だと思います。伝統とは、ただ古いから良いのではなく、その中には現代にこそ必要な知恵があり、それを如何に今に生かすかが求められているのではないのでしょうか。

《歌枕直美の海外公演》

舞台芸術を通して、日本の「歴史」「文化」「精神」を世界の方々に伝えたいと、ヨーロッパ諸国を中心に八カ国二十二都市での海外公演を行ってきました。二〇〇七年日本ポーランド友好回復五十周年の記念行事に出演がきっかけとなり、ヨーロッパ各国の大学の日本



学科や東洋博物館、大使館、芸術祭、歴史的建築・宮殿コンサートなど、音楽

を通して万葉集や古事記などを伝えることで、国や言語を超えて「日本人の魂心を感じた」とのお声を頂戴しました。また、ポーランドの大学では歌枕スタイルで演奏つきの講義も行いました。



2009年ポーランド・古城レジナ城

歌枕直美音楽教室

音楽は人の人生を豊かにするという思いのもと、ピアノとヴォーカルレッスンの音楽教室を開設。歌枕は、教室開設当初、子供さんのレッスンの成果は、その時の教材の進み具合や器用に弾けるかどうかでなく、本当の成果がわかるには十数年かかると考えていました。コンクールやグレードなどを取ることを目的とせず、音楽が心の友となり、心が豊かになり、そして支えとなる力になることを信じ、三十年にわたり邁進してきました。また「ピアノを弾く、歌を歌う」という技術面のみでなく、『音を聴く耳を育てる』という考えをもとに、音色の基準を自然とよいものを感じれる環境作り、うたまくらピアノ工房と連携をとり、常に美しい音色を感じる環境を整えています。

《ピアノオリジナル教材開発》

歌枕直美編集うたまくらオリジナル教材を開発。クラシック、ジャズ、ラテン、民謡などの名曲を原曲のイメージを活かしてピアノ曲にアレンジされています。原曲よりも演奏する音符の数は減っても、音色の豊かさは変わらないアレンジになっており、音楽性を大切に、心の豊さを表現できる教材です。教材開発は大人の方だけでなく、子供さんの教材も



歌枕直美音楽教室 2022 年新春発表会
—ムラマツリサイタルホール新大阪 於—

開発してきました。「音符を読めて、高い技術の曲を弾く」ということだけを目的とするのではなく、子供さんたちが成長していく中で大切な感受性を育て、表現する、そして聴く力も育んでいきます。中でも「子供の世界」は、シュタイナー教育の考え方を一部取り入れた独自のレッスン法で音楽の域だけではなく広い領域で、子供さんの成長過程で大切なエッセンスが入った教材となっています。

「祝うたまくら社設立三十年」

歌枕直美友の会会長・やまとうたを歌う会会長・歯科医師

竜門 陽子

うたまくら社設立三十年、おめでとうございます。

ひたむきに歩み始めた第一歩は、不安を持ちつつも輝いていたと思います。そこから半年、一年、五年と徐々にスピードをつけて走り続けた日々。そのどこかの瞬間で、私も『うたまくら』に出会いました。最初の感動から、やまとうたコンサートへの参加、そしてやまとうたの世界へ引き込まれてゆき今に至ります。

日々、当たり前のように吹田に通ってコンサートを聴き、茶論で皆さまと食事をしたりお話をしたりして過ごしていますが、これがとても贅沢なひと時だと改めて感じます。今では定着した茶論ですが、歌枕先生がヨーロッパで体験した空間を再現されたと聞きました。誰もが音楽を聴き、歌い、そして食事をして話すスタイルはよくあることだと思いがちですが、同じ場所でも仲間と共有する音色と話と料理はすべて手作りで温かく感じます。現代社会では忙しく過ごしている人が多く、特に食事に関しては淡々と済ませてしまうことも少なくありません。誰と、どんな風に食べるか、というのは生きていく上でとても大切なことだと思います。音楽だけではなく、『生きる』ための大切な心の栄養も与えられる空間はここ、うたまくら茶論にしかありません。

これは一瞬でできたことではなく、『うたまくら』があつて、みんなが集ってできた尊い場所だと思っています。

また、同じ女性としてとても懂れます。信念を持って起業され、楽な年月だけを過ごしてきたことはないはず。押し寄せてくる困難に、強さとやわらかさで向き合ってこられた歌枕先生を、心から尊敬します。積み重なった日々は一瞬、一瞬が尊く、これからも素晴らしい日々を重ねてゆけるよう心から応援しています。

歌枕直美先生が活躍される、この同じ時代に生きていることを感謝して—

《やまとうたの世界》

歌枕直美のオリジナル記紀・万葉集「やまとうた」を、幼稚園からシニアの方まで、一人一人の表現で歌ってくださいています。歌枕は、小さなお子さんは、記紀・万葉集の歌の意味はわからないかもしれないけれど、その言葉の響きや音楽から何かの魅力を感じて歌っておられ、いつか意味がわかってくる時期がきて、その方の人生の何か支えになってくれると嬉しいと話しています。そして音楽教室より「やまとうたを歌う会」が誕生。やまとうたを愛して下さる生徒様出演による「絃美の宴コンサート」を年二回開催しています。「やまとうた」から選曲された歌を、歌枕司会進行のもと演奏してください、いつもとても個性的で、自分の人生を重ね合わせるような歌で感動いっぱいコンサートとなっています。

歌枕直美音楽教室 YouTube チャンネル「記紀・万葉劇場」では、生徒様・講師陣による「やまとうた」の演奏を紹介しています。

|| 歌枕直美音楽教室 講師陣 ||

主宰 歌枕直美

主任講師 岩城智穂

担当講師 岩城喜美子

担当講師 笹木真紀

担当講師 妹尾由美子

うたまくらピアノ工房

現在、うたまくら茶論に鎮座するアップライトピアノベヒシュタイン パリサンダー（一八八九年ドイツ製）と出会い、職人魂の込められたその何とも美しく気品のある姿と音色に、「このピアノは、私たちの幸運の女神だ！」と歌枕は直感したそうです。そして翌年、コンサート会場でイタリアから帰国したばかりの荒木欣一（現うたまくらピアノ工房主任技術者）と出会い、歌枕はその日のピアノの響きを聴き、今日のピアノはすごく良い！と感じ、ピアノ

の仕事をするには、個性ある本物の楽器、演奏者、技術者の三位一体が必要、本物の音色を音楽家として紹介して行きたいとの信念でうたまくらピアノ工房を開設し、現在まで取り組んできています。そのピアノをはじめとする鍵盤楽器の魅力を紹介する「時代を語るピアノの響きコンサート」では、技術者の荒木欣一と共に、歌枕自らがその楽器の個性と歴史的背景などを紹介しています。

「発信する」

株式会社うたまくら

ピアノ工房主任 荒木欣一

うたまくら社が創立された同じ日一九九二年四月一日にイタリアから帰国して日本での基盤作りが始まりました。輸入ピアノ販売会社に就職しましたが、ピアノに向かう何かが違うという感覚があり五年後に辞めてうたまくら社に入ることになりました。自分では全く何もできない状況からの出発でした。三十五年前にドイツで百年前のグランドピアノを修理していたマイスターとの出会いが今の自分の立ち位置に導いてくれたように思います。またピアノ作りを厳しく教えてく

れたベヒシュタイン工場のマイスターの言葉も誇りとなつて今でも心に響いています。

今、楽器業界はどんな大変な時代に突入していきました。しかし、うたまくらならではの取り組みで今では全国のお客様からご依頼を頂き、若い技術者が集まり、技術を磨き、皆で修理をして、お客様からの思いのピアノの修理、世界にひとつだけのピアノを届ける工房へと成長してきました。うたまくら社のモットーの一つ、オリジナルは勝つ、そしてそれは生き残る。先細っていく楽器業界の将来、本物の技術は生き残って行きます。それを次の世代へと橋渡しをやっていく時期に入ってきました。三十年が次の五十年へと繋がっていくように、業界全体が良くなっていくように動き続け発信していくことが使命です。



《幸運の女神》 C.BECHSHTEIN Palisandae
ベヒシュタイン パリサンダー 1889 年ドイツ製



(左から、加藤正人・歌枕直美・荒木欣一)

2022年2月「ベヒシュタインの響きセミナー」

うたまくらピアノ工房にて

《世界のピアノ展示・販売》

歌枕の理念の元に、うたまくらピアノ工房では、ピアノメーカーや時代に関係なく、さまざまな個性あるピアノを、展示・販売しています。日本ではあまり知られていないメーカーのピアノも取り扱っています。そのため、全国各地よりこだわりの音色を求めて、うたまくらピアノ工房まで足を運んでくださる方もいらっしゃいます。そして直感と感性に響く運命のピアノとご縁を結んでいます。

《新生ピアノ》

うたまくらピアノ工房では、「新生ピアノ」という考えを柱に、時代を越えた本当にいいものだけを現代の技術で新しく

生まれ変わらせ、伝統を未来へ伝承し、新たな価値（新生）に変えて伝えていきます。うたまくら茶論にあるベヒシュタインパリサンダーは今から十五年ほど前に、ピアノ技術者 荒木欣一によって修復作業を行い、新生しました。製造の際にはさまざまな職人が関わり、ピアノの中には当時の職人の名前が残されていました。次の世代へと繋いでいく『新生ピアノ』にはただピアノを修理・修復するだけでなく、職人たちが込めた魂も伝えていきます。

《ピアノ技術―依頼修理・研修》

うたまくらピアノ工房でのピアノ修理は、普段から調律に行かせていただいているお客様やご紹介によるもの、またネット検索でお問い合わせいただいたものなどさまざまです。修理内容も塗装以外のほとんどの修理をうたまくらピアノ工房内で行なっています。メーカーや時代に関係なく行う修理は、うたまくらオリジナルの信頼と技術があります。

また、技術者の荒木欣一の技術を習得したいと全国各地よりピアノ技術者の方が研修に来られます。そしてさまざまなノウハウを身につけ、実際の現場で生かされています。

二〇二三年からは見習い制度を導入し、後進の育成にもつとめます。

「うたまくら創立三十周年おめでとうございます」

株式会社ベヒシュタイン・ジャパン

代表取締役社長 加藤 正人

歌枕さんとの出会いは、うたまくら社設立一〜二年後だったと思います。その出会いのきっかけを作ってくれたピアノが、私がドイツ手工業のマイスター制度の中で、研修を実現することができた、ベヒシュタインピアノでした。戦前にベルリンで製作されたピアノが、うたまくら社と弊社を繋いでくれました。うたまくら社の茶論を始めて訪問した際、お見せいただいたベヒシュタインは、燭台付きの象嵌細工が施された、古き良き時代そのものを全身に纏ったピアノでした。

ピアノ講師やピアノ愛好家宅をドイツで訪問した際、リビングルームで奏でられる“心地よい響き”体験をしたことがしばしばありましたが、その記憶がそのピアノによって引き出されたことを覚えていきます。歌枕さんが、手元に迎え入れたベヒシュタインを享受しながら、多くの方に自らが感じられる感動や、音楽の楽しみをお伝えすることも、茶論運営の基本にあることを聞かせてくださいました。そのコンセプトを常に核に置かれながら、大和の時を、西洋音楽を通して現代にお運びになる活動も軸に加わり、多くの方々に“幸せな時の提供”をお続けになった事に、敬意の念を抱いております。これからも引き続き、歌枕さんを始めとする、うたまくら社の皆様のお力で、豊かな時を多くの方々にお届けになってください。

歌枕直美お手製料理の数々



「うたまくら茶論（さろん）」

うたまくら茶論（さろん）は、歌枕直美の音楽制作と発表の拠点で、ここで数々の作品が誕生し、全国・世界へと発信しています。また食事付きコンサートをはじめとする文化交流の場となっています。

歌枕が二十代の頃、ヨーロッパに旅した時に、ウィーンのサロン文化に触れ、カルチャーショックを受けました。大ホールでのコンサートのみが本物でなく、この小スペースのサロンに胸を打つ本物の演奏があることを体験。そこには人が集い、音楽があり、食事・お酒があり、語り合い、その交流から新しい芸術文化や発想が生まれて来ている歴史がありました。



いつかそのような環境を持ちたいという思いから、二〇〇四年一月蠟燭のあかり、歴史的鍵盤楽器、装飾品から食器まで、歌枕のこだわりのスペース「うたまくら茶論」を開設しました。友の会会員制「やまとうたコンサート」をはじめとする少人数制での食事付きコンサートを開催。お食事は、歌枕が旬の食材を活かし、ご参加くださるお客様のお顔を思い浮かべて、心をこめておもてなしをしております。様々な分野の皆様が全国からお越し下さり、歴史文化・芸術談義に花を咲かせています。茶論の食事メニューは、歌枕流の和食、洋食、アジア料理など、アイデア料理が並びます。また、歌枕の趣味で骨董品のお店で購入したお皿や

「うたまくら設立三十周年記念を祝して」

伝承料理研究家 奥村彪生

わが師歌枕直美さんが会社を設立してから二〇二三年三月で三十周年を迎えましたこと、誠にめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

私が歌枕さんの存在を知ったのは今から二十年前のことです。大阪府枚方市にある酒造会社の社長から依頼され、その酒蔵で『万葉びとの食べもの』の講演を行った時でした。約束通りの時間に行くとその酒蔵ですでに女性の歌手の方が、聞いたことのないリズムで何やら歌い、かつ語っていました。聞いていると何か心身が癒される思いでした。舞台を入れ替わる時お互いに軽く会釈しましたが、私の講演が終わると改めて名刺交換をして挨拶。その時に「万葉歌」であることを知り、万葉時代を語る同志がいるのだと感動しました。歌と食は万葉時代から貴族の宴席ではワンセットでした。帰る時になつて歌枕さんに最初のCDをお土産に頂戴しました。音楽で綴る万葉集「あさね髪」です。家に帰って早速聞きました。一回で聞きほれました。口ずさんでいると何曲かは私でも歌えると気付き、大きな声を張り上げて歌いました。時には講演会の時に歌枕さんに無断で紹介していました。



2019年「サライ」12月号 奥村彪生「朝めし自慢」にて、上記写真と共に、万葉集を歌う先駆者・歌枕直美と紹介。

二〇一〇年奈良・登大路ホテルにて
大海人皇子に扮する奥村先生と歌枕直美

音楽と食事と語らいの場「うたまくら茶論」があることを知ってからは毎月一回金曜日の夜になると一品酒肴を自宅で作りして、奈良から吹田まで茶論に運び、師匠兼シェフの歌枕さんの料理の友に加えてもらいました。茶論に参加して万葉歌を歌い、飲食しながらの師匠や参加者との会話が私の宝物に成りました。ところが二〇一六年浜松公演後に病に倒れましたが、リハビリに励み、右手は不自由ながら見事に復帰なさいました。歌手以外に語り部として磨きかけました。チームワーク抜群のスタッフの皆様、このコロナ禍の中、公演はままなりません笑顔忘れず、光明の来る日を待ちましよう。株式会社うたまくら の更なる繁栄を祈っています。



うたまくら茶論（さろん）

伝承料理研究家の奥村彪生先生から歌枕が譲り受けたお茶碗やお椀、陶芸家の加藤輝雄先生の器、そして諸先輩方よりいただいた漆器や折敷などに美しく盛りつけられて出てきて、単に食事でない至福のひとつとなりまます。常々、器は貴重な物でも飾る物、直しておく物でなくて、使って価値があるものだからと、歌枕は話しており、音楽と共に心も身体も満たされる豊かな時間をお届けしています。

茶論には、様々な企画により小さなお子様から八十代の方まで、世代を越えた皆様がお集まりくださいます。音楽・文化・会話・食事を通して、年齢も職業も関係なく共に過ごし響き合う心は、何よりもの財産だと思います。これからも皆様と共に過ごせる場所として、より磨きをかけていきます。

会社概要

文化メッセージが私たちの仕事です。

新たな価値の創造

私たちは、さまざまな人やもの、こととの「出会い」を宝物に音楽を基本に「うたまくら。」らしく「喜びと夢のある」文化メッセージを創造しより多くの人の心に届けていきます。

日本の良さの再編集と伝承

私たちは、日本の良いエッセンスや精神（文化）と時代の価値との調和と融合を図ることで、新たな文化・芸術を生み出し、社会へ、そして次の世代へと語り継いでいきます。

人の交流と教育の推進

私たちは、音楽で響き合う心の輪を大切に、教育や情報の発信を通じて新たな発見や心の気づきをサポートし、こころ豊かな生活や社会の実現に貢献するとともに、未来への種を育んでいきます。

編集後記

「三十年という年月」

代表歌枕の磁力の如く、特別な方々とのご縁が生まれ心がつながり、新たなことが生まれる瞬間を見続けてきました。

創立当初、京町家のうなぎの寝床の様に間口は狭くても奥深い仕事を、小さくてもここにしかないからと、全国からお越しただける仕事をしたいと話していた通りになりました。

以前、もと銀行員だった方から、うたまくらはどうして経営が成り立っているのか不思議だと、いくら価値あるものでも大量生産することはできない、そのような世界で経営をされていることは想像がつかない、と言われたことがあります。歌枕は、地道に知恵と行動力で実践してきました。

人生の中で一番濃厚で貴重な三十年をうたまくらで生き、そして普通ではできない多くの経験をさせていただいたことに、心より感謝いたします。三十年さまざまな形で、うたまくらをご支援くださった皆さま、本当にありがとうございます。

また新たな時代を、よろしくお願いいたします。

松田千鶴